

ホームレスを対象とした就労つき自立支援の可能性と課題  
—元ビッグイシュー販売者 Tさんの語りと生活史から—

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
土井 亨

本研究は1人の元ホームレスの男性の語りと筆者との支援現場での関わり合いの生活史から、彼の過去の生活や行動に焦点を当て、個別具体的なふるまいから、当事者の主観的な意味づけや志向性の理解を試みた。そして、自己責任論を内化し自分を卑下するホームレスにとって、ビッグイシューや生活保護といった自立支援の取り組みが、どのように位置づけられ、いかに貢献することができるかを模索することを本稿の目的とした。

当事者の語りと筆者との支援現場での関わり合いの生活史から、たくさんの矛盾や葛藤を含み込み、社会や自分自身と折り合いを付けながら生きていく、その動的過程が浮かび上がってきた。そして社会の偏向したホームレス像を組み込み、社会のまなざしを内化する当事者の志向性が浮かび上がってきた。それは一般社会の人々に対しては躊躇や遠慮、他のホームレスに対しては過剰なまでの嫌悪、そして自分自身には自己否定、自責感といった形で、様々な語りに表れており、当事者のふるまいや生活に様々な影響を及ぼしていることが示唆された。

そしてビッグイシューが雑誌販売を通じて、ホームレスに一般市民と対等に関わる機会を作ることで、ビッグイシュー販売者は「ホームレス」に変わる「労働者」としての新たな位置づけを獲得することが示唆された。それは自分の尊厳を守れず卑下する状況を乗り越える可能性を持っていると言えた。しかしその一方でビッグイシューは労働を通じた援助特性故に、「勤勉」が望ましく「怠惰」は問題だとする世間の論調を否定できず、踏襲している側面があることも指摘された。

ホームレスの自立支援における今後の課題として、労働社会に適応できない者に対してどのように社会とつながる機会を提供していくか、そしてそれと並行して、当然のものとして受け入れられている「勤勉さ」が絶対的に正しいとする自明性を問い直していく必要性が示唆された。